

世界史

台頭するローマと「地中海の女王」フェニキアの対決

両国の勝敗を決したものは何であったか？

「地中海の女王」への挑戦

ローマは南イタリアまで進出し、メッシナ海峡を隔てて、すぐ向こうにシチリア島を眺めることができるようになった。しかしそのシチリアや、さらに広く海外に進出する意図はまったく持っていなかった。当時シチリアはカルタゴの勢力範囲になっていた。

カルタゴは紀元前9世紀末ころに、フェニキア人(ローマ人はポエニ人と呼んだ)の有力な都市テュロス島の植民市として興った。テュニス湾の要害の地をしめ、背後に豊かな平野があり、しかも地中海の中央に位置するという地の利をえていたので、フェニキアの植民市のなかでも最も強大となり、しだいにサルディニア、シチリア島西部、バレアス諸島、イスパニア(現スペイン)南部に勢力を築いた。かれらは商業と航海に長じ、ヘラクレスの柱と呼ばれるジブラルタル海峡を越え、遠くブリタニアにおもむいて錫を運び、アフリカでは象牙・金の採取を行い、富み榮えて「地中海の女王」とうたわれていた。

カルタゴの経済、金融の制度は当時としては最も先進的だった。ローマがようやく粗末な貨幣を鑄造し始めた頃、カルタゴはすでに銀行券があった。カルタゴの通貨は、地中海世界の中で、今日のドルと同じ国際通貨の地位を占めていた。紙幣(皮幣と言うべきか)の価値は国庫にあふれる金に保障されていた。カルタゴが被征服民にまず強制したのは、かなりの重税だった。例えばレプティス市は、カルタゴに服属するという大なる栄誉の代償として、年365タレントゥム、ほぼ10億円をおさめなければならなかった。このような手口で植民地を収奪して恨みを買ったことが、のちにローマに敗北を喫する原因となるのだが、この強敵に出会うまではその方法こそカルタゴ市にかつてない繁栄をもたらすものであった。

カルタゴの国制は、ローマに似て貴族の力の強い共和政であったが、ひとつ重大な相違点があった。これは、ローマでは民政と軍政が分離されず、執政官は最高の民政役人であると同時に最高の軍司令官であり、しかも任期1年という素人に近かったのにたいして、カルタゴは民政と軍政が峻別され、将軍は終身の一種の職業軍人であった。そのためカルタゴの将軍のほうのはるかに戦争巧者であったが、戦巧はただちに政治家の嫉妬をまねくという致命的な弱点を持っていた。軍隊も地続きの隣国からの驚異がほとんどなかったため、カルタゴは陸軍を重視しなかった。カルタゴ人は軍隊生活が嫌いで、原住民から傭兵を募集した。ヌミディアの騎兵など、北アフリカの近隣の種族や、スパルタ歩兵などギリシア人までも含む混成部隊であった。傭兵ということは職業兵士ということであり、ローマの農民出身の素人兵士とくらべてやはり戦闘はうまかったが、祖国への忠誠という点ではローマ兵に劣り、その戦力は将軍個人に対する忠誠と信頼にかかっていた。対ローマ百年戦争でカルタゴ陸軍のあげた大戦果は、ハンニバル、ハミルカル(ハンニバルの父)、ハストバル(ハンニバルの義兄)ら古代最高の名将の天才のたまものなのである。

一方、海軍は強力だった。カルタゴ連合艦隊は、平和時にも500艘の五段櫂船を備え、最強を誇る。五段櫂船を備え、最強を誇る。五段櫂船は当時の最巨艦、快速、軽快で、赤や緑や黄色で派手に塗られている。提督は熟練有能、羅針盤なしで地中海を疾駆し、自家の庭池のようにこの海を熟知している。スペイン、フランスの屈曲の多い海岸線には、補給所、情報局が置かれ、地図制作所は精密有能に働く。ローマが陸上の覇権を追うに急で海軍の育成を怠っていた間、カルタゴ艦隊は西地中海の王者であった。うっかり近づいた外国船は、問答無用で拿捕または撃沈されてしまう。

カルタゴの発展は海上の商業・貿易であって、本来陸の国であるローマとの利害の衝突はなかった。けれども南イタリアがローマの勢力圏内に入り、レギウムの対岸にシチリアが間近く望見されるようになると、ローマはマグナ・グレキアの商業都市のパトロン(保護者)として、カルタゴの海上勢力と対立する情勢となった。しかし、ローマ自体はなお農業国であり、好んで海外に進出し、カルタゴと事を構える意図はなかった。ところが思いがけないことから、両者の衝突がおこり、地中海をはさんで、二つの国家と民族の運命をかけての戦いであるポエニ戦争の死闘がくりひろげられることになった。

ことのおこりは、シラクサ王アガトクレスの傭兵となったカンパニア出身のマメルティニ(軍神マルスの兵隊の意)が、王の死後、ギリシア植民市メッシナを占領した。彼らは暴虐な傭兵隊で、メッシナで市民を殺したり、婦女子を分配したりした。シラクサのヒエロン2世はマメルティニの討伐を開始し、マメルティニは敗北し、追い詰められたので、カルタゴかローマのいずれかに救援を求めるほかはなくなっていた。ローマの元老院は、この救援に応えることが、カルタゴとの大戦争を引き起こすことを見とおして、大いにためらったが、民会はついに援軍派遣を決議し、戦端が開かれた。前264年のことである。

戦争が偶然なことから勃発することは珍しくはないが、ポエニ戦争の起りもその例である。しかしまたローマがやがて地中海世界に進出して行くのが、歴史の必然であるとするならば、いずれは起るべきことが起ったともいえるであろう。

名将ハンニバルのイタリア遠征

カルタゴは第一次ポエニ戦争の敗戦で減退した国力の回復をイスパニア経営に向けた。ハミルカル・バルカスは紀元前236年、信頼する軍隊を率いて、一族とともにイスパニアに渡った。そのなかには少年ハンニバルもいて、父ハミルカルとともに祭壇でローマに対する復讐を誓ったといわれる。ハミルカルはイベリア半島で原住民の諸部族を従え、兵を養った。しかし彼の政策は巧妙であったので、紀元前231年にローマの使節が視察にきたときも、ローマに償金を支払うため、新しい資源を探しているのだと言い逃れることができた。

ハミルカルが戦死したのちは、婿のハスバドルが後継者になったが、紀元前221年、ハスバドルも戦死したのち、兵士たちはハミルカルの長子ハンニバルを後継者に推戴した。天才ハンニバル、時に弱冠26歳、すでに18年、軍営で兵とともにしている。故郷を出るとき父とともにたてた誓いは片時もかれの脳裏を去らぬ。

古代の名将のうちで最も偉大とは言えぬとしても、最も天才的だったことは確かである。頑健で粗食をいとわず、智謀と勇気は無限である。ティトゥス・リヴィウスによれば、かれは突撃の時は常に先頭に立ち、退却のときはしんがりを守る。このリヴィウスを含めローマの史家はハンニバルの貪欲、残忍、非道をひどく強調する。かれがローマ軍を再三再四わなにかけて知略の冴えは、たしかに悪魔的である。だがそれゆえにいっそう兵士たちはかれを慕い、かれら盲従した。威信を確立するために金モールの位階章を必要としなかった。兵士と同じ服を着、同じ苦勞に耐えた。その上かれは優秀な外交家、スパイ作戦の大家でもあった。

9歳で国を離れたきりでカルタゴでは誰もハンニバルの名を知らなかったから、戦闘開始に際して母国の同意は期待できない。だからこそこちらが宣戦するのではなく、むこうから宣戦させなければならぬ。前218年、ハンニバルはサグントを囲む。サグントはローマの同盟市だったが、両国の勢力圏の境界よりもカルタゴ側にあるので、ローマの抗議をハンニバルは一蹴する。敵を侮り切っていたローマは最後通告を發し、こうして第二次ポエニ戦争が始まる。

サグント市は8ヶ月で陥落、後顧の憂いを断ったハンニバルは、イスパニアの防備を弟のハスバドルに任せ、象30、歩兵5万人、騎兵9千人を率いてエブロ河を渡り、アルプス山中に入った。アルプス越えは、これまでガリア人が軍を率いて行ったこともあり、未踏査の通路ではなかったが、この山地にいる原住民が攻撃して投げ下ろす落石には悩まされたうえに、季節は9月に入っており、すでに新雪が万年雪の上に降り始めていた。そのため足を滑らせて谷間に転落するものもあり、多大の兵馬や戦象を失い、北イタリアまで下ってきたときには、2万人の歩兵と6千の騎兵に減っていた。

前217年、エトルリアのトラシメヌス湖畔でコンスルのガイウス・フラミニウスの指揮の下にローマ軍はカルタゴ軍と戦ったが、この戦いでローマのコンスルとハンニバルの間にはアマとプロくらい差があることが実証された。ローマ軍は完全に包囲されて全滅し、フラミニウスも陣没した。緒戦の大敗に、ローマでは、名門出のファビウス・マクシムスを独裁官に選んだ。彼はハンニバルに正面から決戦を挑むことを避け、彼の進路を後ろから追跡して、行動を牽制した。この作戦は破竹の勢いのハンニバルに対しては、効果のある作戦であったが、その当時はローマ人に不人気で、ファビウスは「臆病者」というあだ名をつけられた。後になって、彼の偉さがわかり、「ファビウスは臆病によって国を救った」と奇妙なほめられかたをした。しかしそのときのローマ人は積極作戦を支持し、前216年、二人の執政官パウルスとヴァロに7万の歩兵と6千の騎兵をアプリアのカンネーに投じて敵の約4万人の歩兵、1万の騎兵との決戦に出た。結果は戦史に例を見ない包圍殲滅戦となり、ハン

ニバルの用兵の妙を思う存分発揮させたにすぎなかった。

しかしこの大勝利も、ハンニバルの期待したローマの「同盟者」の大量の離反という結果を生まなかった。もちろん、南イタリアではカンパーニャのカプア、つぎにはタレントゥムのようにローマにそむくものも出たが、ローマのイタリア統治の卓越はこの最大の危機においてみごとに証明された。ハンニバルは個々の戦いに勝ちながら戦略の基本線においてたいへんな錯誤をおかしたのであった。ローマの市民の受けた打撃ははかるべからざるものであったが、この大打撃によって市民の愛国心は極度に昂揚した。従軍志願者は相次ぎ、富裕市民は自分の奴隷を兵役に提供した。かくして前 216 年のうちにローマは敗戦前と同じ兵力を出すことができた。かつてピュルロスの使者はその王に、ローマ軍は一頭を切れば二頭を生ずるギリシア神話の大蛇(ヒュドラ)のようだと報告したというが、カンネーの大敗後はまさにこの比喻のとおりだった。これに対して、カルタゴ本国は勝利者ハンニバルの名声をねたんで戦争を継続するための援助をしなかったため、カンネーの戦いを峠にカルタゴはジリ貧に陥るのである。

勝利の女神はしだいにローマに微笑みかけてきた。兄ハンニバルを助けるために北イタリアまで進撃してきた弟ハスドバルは、ハンニバルに連絡を送った命令が、不運にもローマ軍に捕らえられたため計画を知られてしまい、紀元前 207 年、メタウルス河畔に待ち受けたローマ軍に敗れて戦死した。ハスドバルの首はやがて南イタリアにいたハンニバルに送り届けられた。ハンニバルは弟の死を悼むとともに、イタリア半島南端のブルティウム地方に退いた。

カンネーの戦いの後も、ほとんど敗れたことのなかったハンニバルも、戦力不足のためジリ貧に陥り、守勢をとるほかはなかった。ついにスキピオはアフリカに上陸し、カルタゴの本土に迫った。カルタゴはハンニバルに帰国を命じた。ハンニバルも紀元前 203 年、ついに 15 年間奮戦したイタリアを生き残りの老兵とともに引きあげ、祖国の土を踏んだ。父につれられてカルタゴを去って以来 33 年目であった。

こうして翌紀元前 202 年、ザマにおいて最後の決戦が展開された。歩兵の戦闘はしのぎをけずってあい譲らなかったが、騎兵はヌミディアの騎兵を加えたローマ軍が優勢で、敵陣を背後から包囲したので勝敗は定まった。スキピオはハンニバルの戦術のお株を奪い、14 年前のカンネーの戦いの復讐をみごとなしとげたのである。

翌年、ローマに降伏したカルタゴは、すべての海外領土を失い、1 万タレントという莫大な償金を 50 年間に支払い、10 隻を残してすべての軍船を引き渡し、ローマの承認なしにアフリカで戦争をしないことを約束した。こうして「地中海の女王」は一小国に転落した。スキピオはローマにおいて「カルタゴ人とハンニバル」に勝ち得た勝利の凱旋式を行い、征服地の名前にちなんで「アフリカヌス」という栄えある名を与えられた。

他方、敗れたハンニバルも失脚するどころか、執政官に選ばれ、祖国の復讐を計り、政治や財政の改革に着手した。しかしローマはハンニバルを恐れ、紀元前 195 年、彼の身柄の引き渡しを要求した。これを知ったハンニバルは、いち早く逃れ、シリア王アンティオコス 3 世のもとに身をよせ、マケドニアと同盟してローマを攻めることを説いたが、とりあげられなかった。シリアが敗れたのち、彼はローマの追っ手を逃れて、小アジアのビュニア王ブルシアスのもとにかくまわれたが、ローマの追っ手がここまで追いつめてきたので、ついに毒杯を仰ぎ、波乱に満ちた生涯を終わった。

しかし凱旋将軍のスキピオも、やがて大カトーにひきいられた保守派と対立し、シリアが支払った償金の一部を着服して、部下の将兵に分配したと元老院に訴えられた。彼は釈明することはできたが、声望を失い、公生活より退いて失意の晩年をおくり、かつての好敵手ハンニバルより 1 年ばかり前に死んだ。勝者にも敗者にも等しい運命のきびしさであった。

引用文献 【教養文庫 『世界の歴史2 古代ヨーロッパ』 秀村欣二・三浦一郎執筆】

※実際のプリントには空きスペースに、絵図・写真・地図が入ります